〔講演録〕

石碑は承け継ぐ

―徳は孤ならず、必ず隣あり―

安藤文雄

はじめに

渋沢栄一という実業家は右手に算盤、左手に論語と云ったとか。自分の利益になる事と人としての正しい行為とが喰いちがってしまうのが世のならいのようです。そして、それでも平気な人と、悩んでしまう人にわかれます。しかし、もう一種類の人もいまして、「誇り高き貧乏人」とでもいうような生き方をつらぬこうとします。

ゴヤのエッチングに、死人の口から歯を取ろうとしている男の図があります。手は口の中につっこんでいるのですが、顔はそむけている。実はパッペンハイムという人の書いた『近代人の疎外』という本の口絵に使われたエッチングなのです。

現代のように高度に発達した資本主義社会になりますと、もはや顔をそむけるだけの良心も失ってしまった人々が増え続けているようにも見えます。一方で本当の私は誰なのかと自分探しがさかんになりますが、簡単に発見できる訳もなく、絶望してしまう人もあります。

今日の巡回講座はその「誇り高き貧乏人」が主人公です。一九世紀から二〇世紀にかけて、わずか一〇〇年余りの人生を生きた人々の系譜を、碑文のリレーによって追っていきたいと考えています。そして、少しでも、現代に生きる元気を汲み取っていただければと思います。

なお、紹介する碑文が十編あるので、便宜的に三つのグループに分類しました。今回の会場は青谷町中央公民館ですから、三つのグループの起点とする碑文は、青谷地内に現存するものにしました。その三つの石碑を出発点として、それぞれが、誰のどのような志を、誰がどのように承け継いで行ったか、辿っていくことにします。

最初に結論を申しますと、正しい生き方を固守し続ければ、必ず志を同じくする人々ができるものだという、論語のよく知られた一条「徳は孤ならず、必ず隣あり」を目指（副題と）したのですが、展開させていくうちに、これも論語の一条「中行を得てこれに与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所あり」という結論にたどり着いてしまいました。「狂」とは、ひたすら理想を追い求め、「狷」とは絶対に悪い事はしないという、意思が堅固な人を言います。

金谷治氏の訳によると、「中庸の人を見つけて交われないとすれば、せめては狂者か狷者だね。狂の人は〔大志を抱いて〕進んで求めるし、狷の人は〔節義を守って〕しないことを残しているものだ。（『論語』岩波文庫）」となります。さらに補足すれば、「中行とは、バランスの取れた中庸の人のこと、このような人と友人になれなければ、せめて狂狷の人を友人としよう」という意味です。

今日取りあげた撰文の「通奏低音」とも言うべき自伝があります。それは、陶淵明の「五柳先生伝」です。青木正児著『中華飲酒詩選』の意訳を見ましょう。

先生は何許の人か知れない。其の姓も字も詳らかでなく、宅の辺に五本の柳の樹が有るに因って五柳先生と号したのである。物静かで言葉少く、栄利を慕はない。読書を好むが、意味の詮索は余りやらず、気に入った処が有ると、喜んで食をも忘れる。天性酒を嗜めど、家が貧しくて、常に得られるわけでない。…住居はあばら屋で、日は射し込み、風は吹き通す。短い粗服は穴だらけ継だらけ。飯櫃は屢々空になるが、一向平気である。日頃楽しみに詩文を作って、相当思ふことを述べてゐる。そして損得の念を忘れ、かくて一生を終る次第である。…

十編の碑文に底流するものがここにはあります。それは、自分の生き方に間違いはなく、正しいとは信ずるのだけれど、世界の歴史の中に組み込まれて動かざるを得ないようになった。今の時代の中では、身の置き場がなくなってしまった、というようなことでしょうか。漢学者達は、清貧の生き方しかできなくなったのです。「誇り高き貧乏人」の意味するところです。

一　碁者後藤賢次郎から橋本栗谿への系譜

(1) 碁者後藤賢次郎碑銘

吾因幡国青谷駅後藤仁平氏介佐藤某請後藤賢次郎者碑文於余曰賢之巧于碁術既世之所知而百歳之下恐其湮滅也願得先生之文刻之貞珉以垂于不朽何栄若焉余諾之乃按其状曰賢次郎姓後藤氏因幡国気多郡亀尻邨農家子父曰彦重郎母同郡大坪邨尾崎者女賢生而七歳母罹病弥留遺言曰汝願名于一芸也賢遂志将碁技従郷隣人吉田文者学焉日夕刮劘既称出藍厥后歴学天野平井諸氏大極其蘊奥遂遊大阪与諸名家闘技得嬴凡三十余局云賢為人温厚旧藩辟里正在職十余年未嘗少懈焉藩下賞典特許姓帯刀明治八年十二月二十五日歿行年若干銘曰

碁雖小技　其術亦奇　奇之所極　既被世知
孝追遺言　誠享恵恩　賢也之賢　亦可以伝

明治廿一年三月初旬
因幡鳥取　清水苞撰

碁者後藤賢次郎碑銘

吾が因幡国青谷駅の後藤仁平氏、佐藤某を介して、後藤賢次郎という者の碑文を余に請う。曰く、賢の碁術に巧みなることは、既に世の知る所なり。而れども百歳の下、其の湮滅せんことを恐る。願わくば先生の文を得て之を貞珉に刻し、以て不朽に垂さば、何の栄か焉に若かんやと。余は之を諾し、乃ち其の状を按ずるに、曰く、賢次郎姓は後藤氏、因幡国気多郡亀尻邨の農家の子なり。父は彦重郎、母は同郡大坪邨の尾崎という者の女。賢の生まれて七歳のとき、母は病に罹り、弥留にいたりて遺言して曰く、汝願わくば一芸に名をあげんことをと。賢は遂に将碁の技を志し、郷の隣人吉田文儛という者に従いて焉を学び、日夕刮き劘きて既に出藍と称えらる。厥の后天野・平井の諸氏に歴に学びて、大いに其の蘊奥を極め、遂に大阪に遊びて諸名家と技を闘わせ、嬴を得ること凡そ三十余局と云う。賢の為人は温厚、旧藩は里正に辟し、職に在ること十余年、未だ嘗て少しも懈らず。藩賞典を下し、特に姓・帯刀を許す。明治八年十二月二十五日歿す。行年は若干。銘に曰く、

碁は小技なりと雖も、其の術も亦奇なり。
奇の極むる所、既に世に知らる。孝は遺言に追いて、誠に恵恩を享く。賢や之賢なり、亦以て伝うべし。

明治二十一年三月初旬　因幡鳥取　清水苞撰

この碑は四半世紀以上前に作成した「因伯碑文講読補遺」三六に取りあげました。ちなみに「因伯碑文講読補遺」は、成人大学講座のテキストとして作成したもので、正編六〇巻、補遺編八〇巻（いずれも稿本）からなっています（『研究紀要』第五号の拙文を参考ください）。

この石碑は、青谷小学校横の旧国道・長尾坂を少し上った所に、後で紹介する石井世左衛門の狂歌塚と一緒に建てられています。

碑文中の「母」は大坪村の尾崎とありますが、『青谷町誌』の庄屋一覧表によると、明治五年大庄屋の欄に、大坪・尾崎武平とあります。明治八（一八七五）年一二月二五日に賢次郎は亡くなっていて、年齢は若干としか書かれていませんが、二人が同年輩だったとすれば、あるいは従兄弟だったのかも知れません。碑文を依頼した後藤仁平とは、賢次郎の子どもでしょうか。この碑が建てられたのが明治二一年なので、没後ちょうど一三回忌にあたります。その言うところには、賢次郎の将碁＝将棋の技は今の人はよく知っているが、一〇〇年後には忘れられてしまうかも知れない。そこで石にその生涯を刻んで後世の人々に伝えたいのだ。「其の状を按ずるに」とありますから、履歴書のようなものを持参したのでしょう。しかし、撰者の清水九苞とは面識があったようには見えず、また九苞が将棋愛好者であった気配もありません。九苞は鳥取市内で明治一一（一八七八）年から二〇年まで明倫学舎という漢学塾を開いていましたが、碑文の文頭にある佐藤某という人が、かつて塾生だったのかも知れません。

賢次郎が将棋指しになろうと決心したのは、何事であれ一芸に秀でよ、という母の遺言によります。七歳でこのような決心をするとは面白い子です。吉田文儛という人はどのような人だったのでしょうか。名前からすれば、医者か寺子屋のお師匠さんのような仕事をしていて、将棋に時間をかける余裕のあった人でしょう。賢次郎は入門してまもなく先生を越えたとありますから、かなりの腕前だったのでしょう。

その後、天野・平井両氏に学んだとあります。『大日本人名辞典』には、天野宗歩という将棋名人が当時いたと書かれていますが、平井氏は見当たりません。さらに大阪に遊学して三〇数局の勝負に勝ったとありますが、相手はどんな人達だったのでしょう。

将棋の話の後に、わずかな記述ですが里正の経歴が記されています。里正とは庄屋のことです。時期的には、安政三（一八五六）年の前後一〇数年といったところでしょうか。若い頃は将棋に夢中で、大阪にまで修業に出かけています。庄屋を務めていてできることではありません。「在

方諸事控」（文久二年一〇月）には、気多郡芦崎村組頭庄屋の連名で、中庄屋・後藤賢次郎宛に出された「乍恐御達申上覚」という文書があります。これまで芦崎村では石州瓦を使用していたが、このたび他国瓦の積入（移入）が差し止めになった。しかし、国産品では寸法が合わず難渋しているので、両三年は石州瓦の入津を許可して欲しい、というものです。幕末・維新にかけて、村政も多忙を極めていましたから、将棋に時間をかける暇はなかったのではないでしょうか。

碑文の形態ですが、銘文が本来の碑銘で、前半の散文はいわば前書にあたります。撰者の清水九苞は一行四字、偶数句末に押韻したこの銘に力を込めます。たかが将棋という小技だが、母の遺言を守ったおかげで大成することができた。賢次郎のこの賢明な生涯は、後世に伝える価値がある、と記します。小技から孝子に論点が移される。ここに九苞の感動を見ることができます。

（2）亡友清水九苞墓表

余与清水九苞締交者十数年詩酒徴逐殆無虚月三四年前九苞挙家移伯之倉吉東西索居邈無音耗今茲春初忽接訃信余驚歎曰嗟乎九苞而死乎喪我一良友為之潸然九苞気節之士也胸次恢恢不脩辺幅不節辞説但性狷急不能容物其与人語厲声大罵雖貴紳豪族莫所顧然背面未嘗称人之謫人亦以此多之素有杯觥量又好客客至無論旧新必置酒欵待凡所得金帛悉以供客資家道為之不裕而毫不恤也九苞姓清水氏初字愛治九苞其号称石帆又松城考諱広発君称兵太郎姓黒川氏其先世善兵衛君始拝謁鳥取藩数伝至広発君仕慶徳公大被擢用云九苞少時研究韜畧頗有所得弱冠折節習読経史又学詩文於適処正墻翁業成垂帷授徒其学雖原於閩洛而不苟訓詁章句以渉獵古今通暁大義為主其才最長於詩短章長篇下筆立就書法亦遒勁可範曽為鳥取中学校教員在職九年一旦有所感以病辞免退草意見書以呈当事者不報九苞既罷職家居年余聘為久米高等小学校校長稍有潜績而天不仮之年病没於寓所実明治廿九年二月六日也享齢四十有七帰葬于鳥取三昧山一行寺浮苑室中西氏得一璋二瓦長子克彦年甫十一今為高等小学校生員九苞久膺執釈之任経其指授而成器者多矣曩者門人輩謀立墓石来乞文於余九苞嘗酒間戯余曰相得如此吾死子請表吾墓子如先死吾銘子時余笑而諾之何図其言終為讖今及得門人之嘱治不能堪今昔之感乃叙其概以表之抑我因之地耆宿凋喪能誘掖後進維持世道者落落如晨星而九苞亦為泉下人矣余不独為九苞悲焉而并為斯道悲之也

明治廿九年十月　喬松　森本滋栄撰

亡友清水九苞墓表

余は清水九苞と交りを締ぶこと十数年、詩酒もて徴逐すること殆ど虚月無し。三四年前、九苞は家を挙げて伯の倉吉に移り、東西索居すること邈かにして音耗無し。今茲春の初め忽ち訃信に接す。余驚ろきて歎きて曰く、嗟乎、九苞にして死するか、我一良友を喪えりと。之が為に潸然たり。九苞は気節の士なり。胸次は恢々として辺幅を脩めず。辞説を節かず、但だ性は狷急にして、物を容るること能わず。其の人と語るや、厲声にて大いに罵り、貴紳豪族と雖も顧る所莫し。然れども背面にて未だ嘗て人の謫を称ることなく、人も亦此を以て之を多とす。素より杯は觥量有り。又客を好み、客至らば旧きと新らしきとを論ずるなく、必ず置酒して欵待す。凡そ得る所の金帛は悉く以て客資に供し、家道は之が為に裕かならざるも、毫も恤えざるなり。九苞、姓は清水氏、初めの字は愛治、九苞は其の号にして、石帆又は松城とも称す。考は諱は広発君、兵太郎と称し、姓は黒川氏、其の先世善兵衛君始めて鳥取藩に拝謁して数伝し、広発君に至りて慶徳公に仕えて大いに擢でて用いらると云う。九苞は少き時韜畧を研究して頗る得る所有るも、弱冠にして節を折りて経史を習読し、又詩文を適処正墻翁に学ぶ。業成りて帷を垂れて徒に授く。其の学は閩洛に原くといえども、訓詁章句を不苟ず。古今を渉獵し大義に通暁するを以て主と為す。其の才は最も詩の短章長篇に通じ、筆を下せば立ちどころに就る。書法も亦遒勁く範とすべきなり。曽て鳥取中学校の教員と為りて職に在ること九年、一旦感ずる所有り、病を以て辞免し、退きて意見書を草して以て当事者に呈するも報われず。九苞既に職を罷めて家居すること年余、聘せられて久米高等小学校校長と為りて稍々潜績有るも、天は之に年を仮さず、病みて寓所に没す。実に明治二十九年二月六日なり。享齢四十有七、鳥取三昧山一行寺の浮苑に帰葬す。室は中西氏、一璋二瓦を得たり。長子の克彦は年甫て十一、今高等小学校の生員たり。九苞は久しく執釈の任を膺け、其の指授を経て器と成りし者多し。曩者に門人輩は墓石を立てんことを謀り、来りて文を余に乞う。九苞嘗て酒間に余に戯れて曰く、相得ること此の如し。吾死なば、子請う吾が墓に表せよ。子如し先に死なば、吾れ子に銘せんと。時に余は笑いて之を諾するも、何ぞ図らんや、其の言の終に讖と為りしことを。今門人の嘱治を得るに及び、今昔の感に堪うること能

わず。乃ち其の概を叙して以て之に表す。抑々我が因の地の耆宿は凋喪て能く後進を誘掖し、世道を維持する者、落々として晨の星の如し。而して九苞も亦泉下の人と為れり。余は独に九苞の為に悲しむのみに非ず、并せて斯道の為に之を悲しむなり。

明治二十九年十月　喬松 森本滋栄撰

この碑文は、「因伯碑文購読補遺」二四に収めました。翻刻文のあとがきには「御影石に刻されているが、剥落殊に進行しており、読むに堪えざる状態であったが、数回足をはこび判読すること如此」と記録していました。

さて、碑文中に姓は清水とありますが、父は黒川になっています。室は中西氏ですから養子でもありません。九苞とは鳳凰の九種類の羽色のことです。鳳凰は乱世には隠れ、平和な時代にだけ出現する鳥といわれます。九苞の生年月日は記されていませんが、明治二九（一八九六）年二月六日に四七歳で没していますから、弘化四（一八四七）年前後の生れとなりましょうか。その約二〇年後が明治維新です。つまり、四書五経を学んで青春時代を過ごした若者が、社会の中心で活躍しようとした時には、すでに時代遅れになっていた、というわけです。教育史をたどってみると、明治五（一八七二）年に学制が定められ小学校が開かれます。当初は寺子屋の師匠や、漢学塾の先生がかき集められ、代理の教員を務めます。明治七年には旧藩校・尚徳館内に小学校教員伝習所が設けられ、やがて師範学校となって、新しい教育法を身につけた教員が次々に誕生します。どんな漢文の大家でも、資格のない代理の教員は姿を消していく時代に変わったのです。

碑文にあるように、九苞はどんな意見書を当事者に提出し、そして何故辞職したのでしょう。その後、一年余りは無職のようでしたが、招かれて久米郡高等小学校の校長になっています。詩文を正墻適処に学んだともあります。適処は明治六年に下北条松神村（現北栄町松神）に隠棲します。そして研志塾を開いて漢学の指導をすること二年余、明治八年三月に没して塾は中断します。それを再興したのが、適処の三男佐伯元吉です。『倉吉町誌』によると、再興は明治三一年で、元吉が久米郡高等小学校長在任中のことでした。

とすると、清水九苞は佐伯元吉の前任校長であった可能性があります。碑文を作成した親友森本滋栄によると、亡くなる三、四年前に倉吉に越したとありますから、明治二五・六年の頃でしょうか。数年間の校長職でしたから、「やや潜績あり」という控えめな表現になったのでしょう。『鳥取市教育百年史』には、鳥取市の私塾・私学の一覧表

があります。ここに師範学校教師森本歓一（滋栄）が、私塾「晩成学舎」を明治一一（一八七八）年から四一年まで鳥取市東町で開設して皇漢学を教授したと記されています。同じく清水九苞は、明治一一年から二〇年まで鳥取市西町に私塾「明倫学舎」を開設して皇漢学を教授しています。塾生数ですが、「明倫学舎」の最盛期には七九人、「晩成学舎」には一一〇人が在籍していたようですが、時代の流れの中で生徒の数は確実に減少していったはずです。

九苞と滋栄との交遊ですが、二つの学舎が共存した明治一〇年代が中心であったと思います。鳥取一中時代の『鳥城』（昭和八年刊）には、明治六年（前身である鳥取変則中学の創設年）の職員一二名が紹介されており、その中に森本歓一（滋栄）の名があります。したがって、二人とも師範学校と中学校の教員をしながら、経営する私塾で皇漢学を教えていたわけです。想像するに、その合間をぬってお互いに詩を作ったり酒を飲んだりしたのではないでしょうか。

この碑文は、最初に紹介した陶淵明の「五柳先生伝」によく似ています。清水九苞には気骨があり、正義を守る志が強い人物である。うわべを飾ったり、見栄を張ることがなく、相手によって態度を変えたりしない、と捉えています。まさに「狂狷」の度合いの強い人なのです。理想はあくまでも追求し、信念は固く守って変えない人物だったのです。このような友を失った憤りの気持が銘文に迸ります。そもそもこの因幡の地には、学問道徳にすぐれた大人がいなくなった。若者たちを教え導き、世の中を正してゆけるような人物は、明けゆく空の星のよう、数えるほどしかいない。そのような人物の一人であった九苞も死んだ。私は親友を失ったことだけでこんなに悲しんでいるのではないぞ。世の中に学問道徳を伝えるべき人物がいなくなった事に涙を流しているのだ。

文明開化の夜明けと共に、儒学の星が次々に消えていきました。その悲しみは、この段階ではまだまっすぐに表現されているようです。

では、撰者・森本滋栄の墓碑銘は誰が書き、どこにあるのでしょうか。残念ながらよく分かりません。碑文のリレーをつなげるために、滋栄の弟子にあたる森本元蔵の碑文を見ることで、その代用にしようと思います。

（3）森本元蔵景仰碑

森本元蔵先生我久松里人以慶応二年生初学于大谷小学
校尋入鳥取師範学校中廃更入晩成塾師事喬松森本翁修
漢書而私淑山陽頼氏好読書其遺著欣賞不措及就任大岩

小学校創設夜間課程為青年子弟講読日本外史及政記以明徴皇道啓沃精神嘗謂曰進修存養固無論若夫堅忍持久誰優誰劣請吾与汝等較之毎夜来往由八丁畷途会風雪只手巾包頬已三年如一日未曽懈怠躬行率先淬礪後進概如此我郷党向学蓋自先生始矣既而転任某校以大正六年歿年五十二先生資性温厚忠信恬澹于利名篤学重義超脱于流俗音容卓然欲忘不能諼当年門下諸生毎相見莫談不及先生之徳乃相謀建石其生誕之地永表景仰之意云爾

大正一三年七月

正五位勲六等橋本好蔵代撰

并書篆　岩美郡大岩村森本先生門下生建之

森本元蔵景仰碑

森本元蔵先生は我が久松里の人なり。慶応二年を以て生る。初め大谷小学校に学び、尋いで鳥取師範学校に入るも、中に廃めて更に晩成塾に入り、喬松森本翁に師事して漢書を修め、山陽頼氏に私淑して、好みて其の遺著を読書し、欣賞して措かず。大岩小学校に就任するに及び、夜間課程を創設して、青年子弟の為に、『日本外史』及び『政記』を講読し、以て皇道を明徴し、精神を啓沃す。嘗て謂いて曰く、進修存養は固より論無し。夫の堅忍持久の若きは、誰か優れ誰か劣れる。請う、吾れ汝等と之を較べんと。毎夜来往するに八丁畷に由り、途に風雪に会うも、只手巾もて頬を包むのみ。三年一日の如く、未だ曽て懈怠せず、躬行率先して後進を淬礪すること概ね此の如し。我が郷党の学に向うこと、蓋し先生より始まれり。既にして某校に転任し、大正六年を以て歿す。年は五十二。先生資性温厚忠信、利名に恬澹として、学に篤く義を重んじ、流俗を超脱す。音容は卓然として、忘れんと欲して諼ること能わず。当年の門下の諸生、相見う毎に談の先生の徳に及ばざること莫し。乃ち相謀りて石を其の生誕の地に建て、永く景仰の意を表せんとすと云う。

大正十三年七月

正五位勲六等橋本好蔵代りて撰し并びに篆を書す。

岩美郡大岩村森本先生門下生之を建つ

「因伯碑文購読補遺」に残された記録には、「所在地岩美町大谷字久松部落入口岩本川堤防上道路脇原碑徳田隆一氏採録」とあります。この碑文は在野の研究者であった徳田隆一氏から情報を提供されたものです。

森本元蔵は慶応二（一八六六）年に生れ、大正六（一九一七）年に五二歳で没しています。清水九苞が弘化四（一八四七）年生れですから、およそ二〇歳年少ということになります。

鳥取師範学校は、明治九（一八七六）年一一月に二〇名の生徒を募集していますが、当時の鳥取県は島根県に併合されており、一三年六月には師範学校も廃止になります。元蔵が師範学校を辞めて明倫塾に入ったことも、この動きに関係があるかも知れません。森本元蔵が教職についた大岩小学校（現岩美西小学校）には記録が残されていませんでしたが、近在の小田小学校（明治九年五月設立、現岩美南小学校）に保存されていた「新宮尋常小学校沿革誌」には、明治三三年九月に訓導として就任とありました。三五歳の頃です。「大岩尋常小学校学校一覧」（岩美西小学校蔵）によると、大岩尋常小学校は明治二六年に開校しているので、元蔵はこの年から明治三三年までの八年の間に、三年間だけ勤務していたわけです。時代は日清戦争が終り、日露戦争を目前にした時期です。『日本外史』の講読にも力が入ったことでしょう。

撰文を依頼された橋本栗谿ですが、元蔵の教え子が、わずか三年間小学校の夜間課程で学んだことを忘れず、元蔵の出生した村の入口に「景仰碑」を建てようとしたことに感動したのではないでしょうか。教え子を相手に「堅忍持久」競争を挑み、吹雪の夜も手ぬぐい一枚で頬かぶりするだけ。八丁畷を三年間往復して一日も休まず、模範を示したと碑文にあります。清水九苞や森本滋栄に見た「狂狷」な性格が同じように窺われます。率先実行してこそ生徒にその気持が伝わるという信念が貫かれていたのでしょう。

（4）栗谿散人橋本好蔵自撰墓碑銘

散人以元治元年六月六日生住于栗谷因自号少小好儒雅風流稍長嗜詩酒不治産宦遊于四方足跡遍于海内老大無成帰臥故山翰墨寄傲自遣以楽天命溘焉逝享年（以下刻字なし）

栗谿散人橋本好蔵自撰墓碑銘

散人元治元年六月六日を以て生る。栗谷に住む、因りて自号とす。少小より儒雅風流を好み、稍々長じて詩酒を嗜みて産を治めず。四方に宦遊して、足跡は海内に遍し、老大にして成る無く、故山に帰臥し、翰墨に傲を寄せて自ら遣りて以て天命を楽しみ、溘焉として逝く。享年は

次は、橋本栗谿です。栗谿は東京帝大で漢学を学んだあと、鳥取中学をはじめ青森、札幌、松山等各地の中学校で漢文の教師を務め、最後は山口高商の教授となっています。

漱石の「坊ちゃん」に登場する漢学の先生は、松山の中学校で漱石の同僚であった栗谿をモデルにしているとされていますが、狷介反俗の精神にみちた生涯でした。

その墓所の案内板には、最後の漢詩人とありました。橋本栗谿のファンは多く、書画を描いてもらった人も沢山いますが、自撰の墓碑銘を完結してくれるような弟子はいませんでした。その墓石も、享年までは刻してありますが、何故かそこで終っています。これも栗谿らしいといえます。退職後は故郷鳥取市の栗谷で詩酒三昧の余生を送りましたが、すべての蔵書と作品の草稿は、現在鳥取県立図書館に収められています。

補足ですが、橋本栗谿には、こんな逸話が残っています。これは栗谿の最後を看取った方から聞いたのですが、遺言は「医学生の為に私の身体を献体せよ」でした。実際に、その方の父親が米子の医大まで遺体を運んだということです。

以上、「棊者後藤賢次郎から橋本栗谿への系譜」について見てきました。

二　俳諧師渡辺長七から宗旨庄屋熊谷道伸への系譜

(1) 渡辺長七墓碑銘

先生姓渡辺諱紀綱字長七称風光其先参州岡崎人祖諱延字源次兵衛居和州郡山以達明人提要十官者所伝砲術既能火攻之技応聘本藩食邑二百石加賜銀俸若干父諱武字八郎右衛門配山河氏挙二男伯名東字源七嗣禄叔乃為先生先生精究家業兼通衆技学兵法於加納氏撃剣於藤田氏射於南条氏僉極其至又善半調歌翹楚於藩中而佳句秀唫多鱠炙人口以其所祖芭蕉翁六伝至先生故自号蕉六庵為人温厚淳質廉介不苟取与壮歳隠居于青谷環堵之室侭覆風日箪瓢屢空処之晏然感節触景俳詠述懐時或作歌詩言其志優游以没歯嘗或勧之曰君以砲火之技干諸侯則取食禄如拾芥耳君盍為之先生曰吾非弗知為之唯以吾家之術則藩之秘也吾豈為求禄而漏諸他邦哉言者乃歎服焉其志操率若此文化十年癸酉十月二十七日病卒年八十一葬于邑中専念寺之丘有妾晩挙男女二人男名巌字為助先為其従祖叔父名繋字源内之後唯女在家無承後者銘曰

月唫花詠　楽以忘憂　貧乎奚病　原憲同流

鹿野　熊谷道伸謹撰

今日よりは雲居はるけきたかどのにかへりすむ身ぞもとのふるさと（紀綱）

さらばさらば見残す冬は十九年

蝶楽園蕉六翁風光

渡辺長七墓碑銘

先生姓は渡辺、諱は紀綱、字は長七、風光と称す。其の先は参州岡崎の人、祖の諱は延、字は源次兵衛、和州の郡山に居し、明人提要十官という者の伝えし所の砲術に達し、既に火攻の技を能くするを以て、本藩の聘に応じて、食邑二百石、銀俸若干を加賜せらる。父の諱は武、字は八郎右衛門、配は山河氏、二男を挙ぐ。伯名は東、字は源七、禄を嗣ぐ。叔は乃ち先生たり。先生は家業に精究し、兼ねて衆技に通ず。兵法を加納氏に、撃剣を藤田氏に、射を南条氏に学びて僉其の至を極む。又半調歌に善く、藩中に翹楚て佳句秀唫は多く人口に鱠炙す。其の祖とする所の芭蕉翁の六伝して先生に至るを以ての故に、自ら蕉六庵と号す。人となりは温厚淳質、廉介にして苟くも取与せず。壮歳青谷に隠居し、環堵の室は風日を覆うに侭せ、箪瓢は屢々空しきも、之に処りて晏然たり。節に感じ景に触れて俳詠述懐し、時に或は歌詩を作りて其の志を言い、優游として以て歯を没る。嘗て或之に勧めて曰く、君は砲火の技を以て諸侯に干むれば、則ち食禄を取ること芥を拾うが如きのみ。君盍ぞ之を為ざると、先生曰く、吾も之を為ることを知らざるに非ず。唯吾が家の術は則ち藩の秘なるを以てなり。吾れ豈に禄を求めんが為に、諸を他邦に漏らさんやと。言うものは乃ち歎服せり。其の志操は率此の若し。文化十年癸酉十月二十七日病みて卒す。年は八十一、邑中の専念寺の丘に葬る。妾有り、晩く男女二人を挙ぐ。男の名は巌、字は為助、先に其の従祖叔父、名は繋、字は源内の後と為り、唯女のみ家に在りて後を承ぐ者無し。銘に曰く。

月に唫じ花に詠じ、楽しみて以て憂を忘る。
貧をば奚ぞ病えんや。原憲と流を同じうす。

（後略）

今講座の準備のために三〇年ぶりにこの石碑（墓）を訪ねたところ、墓は傾き雑草に埋れていました。場所は、青谷町の専念寺の裏手にあります。（口絵参照）

さて、渡辺家は砲術家だったわけですが、このことについて『鳥取藩史』軍制志は、次のように記述しています。

渡辺は、格禄ともに武宮につづく砲術家業家なり。寛文の頃玉火矢役人臼杵市郎左衛門なるもの二百石を領す。甥渡辺半左衛門、武宮嘉兵衛門弟なりしが、貞享二年、臼杵市郎左衛門死去後、其縁故及旗本渡辺七郎兵衛の依頼等有り、門弟大筒役中より特に抜でられ、元禄十二年、新知二百石を給せらる。之を渡辺家の祖となす。左れば、同じく武宮流なり。天明年間三代源

七の願により、同人叔父源内更らに召出され扶持を給せられ渡辺両家となれり。後ちに、専ら所謂花火の技に長じ、大坂銀主等饗応の際の如き、其火業を観覧せしめらる

鳥取藩の砲術家としては、水戸藩の神発流を受け継ぐ武宮家が有名ですが、渡辺家は格禄ともに武宮家につづく砲術家だったと記されています。一方で、渡辺長七は俳諧にも長じ、かの松尾芭蕉から勘定して六代目にあたるという蝶楽園蕉六翁風光を名乗っています。『青谷町誌』によると、後述する石井世左衛門はこの風光に弟子入りしたようですが、世左衛門自身は青谷社中の俳人としてはあまり知られていないようです。

墓碑銘の撰者熊谷道伸は文化一三（一八一六）年に五四歳で、渡辺長七はその三年前の文化一〇年に八一歳で没しています。道伸は地域で有名な儒者でしたから撰文の依頼を受けたのでしょうが、異なる分野で活躍する人々をも懐に入れていたという意味では長七も相当な人物だったのでしょう。補足しておくと、長七の人柄を「温厚・淳質」「廉介不苟取与」としています。穏やかだがまっすぐな人、名利にあっさりと、貧乏していたが楽しんで生きたと評価しています。

銘の中に「原憲と同流」とありました。原憲は孔子の弟子で字は子思。清貧に安んじて道を楽しんだ人として司馬遷は『史記』仲尼弟子伝に記します。

「さらばさらば見残す冬は十九年」という辞世の句は面白いですね。八一歳で亡くなったわけですから、本人は百歳まで生きる予定だったのでしょう。

（2）熊谷道伸墓碑銘

先生姓熊谷諱道伸字子屈称長左衛門南峯其号也父曰居
敬其先新右衛門仕於雲州富田城主尼子氏尼子氏滅而后
来寓鹿城下子孫遂家焉以商工為産家大富至先生之父娶
矢嶋氏養女生先生不幸早喪父母育于祖母能全先業先生
自幼好孔氏之道風標異于人比弱冠発志直至阪都受業於
中井竹山夫子之門学既通略極大意博覧書籍兼善文詞天
性篤実清廉不苟容別産之後累除郡長吏奉職無私衆皆靡
然悦服凡遊其門者毎有緩急皆謀於先生而遂無徳色嘗奉
冠山侯之命著鹿野古事談賞賜数品娶原田氏生四男二女
文化丙子秋八月病歿寿五十四葬於城西孤山四方聞者無
親疎無老幼皆為垂涙云
神崎碩明謹誌

熊谷道伸墓碑銘

先生姓は熊谷、諱は道伸、字は子屈、長左衛門と称す。南峯は其の号なり。父は居敬と曰い、其の先の新右衛門は雲州富田城主尼子氏に仕え、尼子氏滅びて后鹿城下に来寓し、子孫遂に焉に家して、商工を以て産を為し、家は大いに富む。先生の父に至り、矢嶋氏の養女を娶りて先生を生む。不幸にして早く父母を喪いて祖母に育てられ、能く先業を全うす。先生幼きときより孔子の道を好み、風標は人に異なる。弱冠の比志を発して直に阪都に至りて、業を中井竹山夫子の門に受く。学既に通りて略大意を極め、書籍を博覧し兼ねて文詞を善くす。天性篤実清廉にして、苟容をもってせず。別産の後累ねて郡の長吏に除され、職を奉ずること私なく、衆は皆靡然として悦び服す。凡そ其の門に遊ぶ者、緩急有る毎に皆先生に謀るも、遂に徳とする色無し。嘗て冠山侯の命を奉じて、「鹿野古事談」を著わして賞賜数品あり。原田氏を娶りて四男二女を生む。文化丙子の秋八月病みて歿す。寿は五十四、城西の孤山に葬る。四方の聞く者、親疎と無く、老幼と無く皆為に涙を垂すと云う。

神崎碩明謹しんで誌す

撰者の神崎碩明については、残念ながら何も分かりませんが、熊谷道伸の事蹟は詳しく『鹿野町誌』に書かれているので、碑文と対比させながら検討してみます。

道伸は後藤賢次郎と同じく、幼くして母親を失い祖母に育てられています。幼い頃より孔孟の学を好み、若くして志を抱いて大阪の懐徳堂に学んだとあります。『鹿野町誌』には、「寛政三年（一七九一）秋、二十九歳になった道伸はさらに学問を究めようと大坂に出た。…しかし残念なことに病気になり郷里に帰らなければならなかった。寛政四年の春であったという。」とありますが、『鹿野町誌』の年代には疑問を感じます。碑文では「弱冠」が懐徳堂に学んだ時の年齢とあります。『礼記』に「二十を弱と曰いて冠す」とあるように、「弱冠」は二〇歳を指します。また、碑文からは学問が成就したように見受けられるので、少なくとも数年間は懐徳堂で学んだものと思われます。

「別産」とあるのは、『鹿野町誌』によると「三十四歳の時山根町に分家（見附草屋）した」ことを指します。また、「在方諸事控」（寛政十一年九月）の項に、芦崎市左衛門と共に熊谷長左衛門＝道伸の二人が宗旨庄屋役を仰せつけられたとあります。ちなみに、宗旨庄屋は「管内の寺社・戸籍・五人組の割替え・宗門改等、人事に関することを統轄した」（『鳥取県史』近世政治）役職でした。

「其の門に遊ぶ者」とあるのは、『鹿野町誌』によると

「道伸の学徳を慕う若者たちが訪れるようになり、いつとなく漢学を教える私塾となった」という意味です。

先述したとおり、熊谷道伸は渡辺長七を「温厚・淳質・廉介・不苟取与」と評しましたが、神崎碩明は道伸について「天性篤実・清廉・不苟容」と評します。「不苟容」とは、みだりに人の気に入られるようなことはしないということで、渡辺長七の「苟くも取与せず」…いいかげんな態度でやりとりしない…と同義です。

このような漢語は、まさにきまり文句なのですが、人の一生を整理する場合、とても便利な言葉で、志の継承ぶりがよく伝えられます。

三　石井世左衛門から坂田潤蔵への系譜

最後のグループになりました。青谷の町人、夷屋石井世左衛門がトップバッターですが、彼の事蹟については、彼の著書『月のみかげ』にある伊良子大洲の序文で紹介してみます。二番目は伊良子大洲ですが、陶淵明と同じように生前に自伝を用意していました。三番目の芝田温は大洲の弟子ですが、大洲の自伝の末尾に書き加えた文章が、宝珠院境内に残る墓石に刻まれています。芝田温の墓碑銘は、足立正声編集の『剥鮮集』（墓石の苔をはがして読み取った碑文を集めたもの）に収められています。最後は芝田温の弟子坂田潤蔵です。彼の墓碑銘は自撰でとてもユニークなものです。この人を芝田温墓碑銘の撰者に仮定して、この継承譜を閉じていきます。

（1）石井世左衛門狂歌集序

石井翁者青屋邑人也以善国風狂体聞于四方自称海辺白人尾藩亜相公覧翁詠草之什甚悦翫之賜以賞誉之言翁則意自以雖是草野之言業已膺大藩恩賚則義不以草野自閉蔵也於是乃介予近鄰文器氏寓其詠草之什於予弱桜之舎以請予叙其首予受而読之喟然歎曰有是哉其感動人乎高者可供諸王公大人賢士達夫之清覧卑者可施諸田畯工婦癡児駭女之濫聴其為体也口不択言唯意所会雅俗並奏巧拙錯出且楽且笑不淫不乱或類戯謔或存鑑戒近乎人情協於事実雖曰狂乎其用則可与彼正而葩者相伯仲矣故所謂動天地感鬼神者在今之世唯狂体之歌可以当之矣宜哉翁之不欲以草野自閉蔵也匹夫而名通於大藩之君豈虚哉是在所宜表而章之況其請之乎迺諾其請既而会四月晦西家夜失火延四方予舎早灰予及妻子数人挺身走出凡百烏有一介不存猶以為幸耳居無幾門人相与糾金買舎於瀼水之外以為塾予然後稍得居室苟合矣於是文器氏来責以前者

之諾且問所寓狂歌之什無恙否乎予具告以状文器氏則曰无妄之災悔之何益独奈翁之託予無以報之先生幸筆其云云以贈乎予之債可償而翁之喜可知也故略叙翁之所以求予者与予之所以取翁者以贈之

文政二年巳卯冬十有二月初吉　山陰稲葉鳥城

伊良子憲子典甫叙

石井翁は青屋の邑人なり。国風狂体を善くするを以て四方に聞え、自ら海辺白人と称す。尾藩の亜相公翁の詠草の什を覧て甚だ之を悦び翫でて賜うに賞誉の言を以てす。翁は則ち意に自ら以らく、是れ草野の言業なりと雖も已に大藩の恩賚を膺く、則ち義として以て草野に自ら閉蔵せざるなりと。是に於て乃ち予が近鄰の文器氏を介して、其の詠草の什を予の弱桜の舎に寓せ、以て予に其の首に叙せんことを請う。予は受けて之を読み、喟然として歎じて曰く、是有る哉。其の人を感動せしむる。高きは諸王公大人賢士達夫の清覧に供すべく、卑きは諸を田畯工婦癡児駭女の濫聴に施すべし。其の体たるや、口に言を択ばず、唯意の会する所を雅俗並に奏し、巧拙錯り出でて、且つ楽しみ且つ笑い、淫せず乱れず、或は戯謔に類し或は鑑戒を存し、人情に近く事実に協う。狂なりと曰うと雖も、其の用は則ち彼の正にして葩しき者と相伯仲すべきなり。故に所謂天地を動かし鬼神を感ぜしむる者、今の世に在りては、唯狂体の歌のみ以て之に当つべきなり。宜なる哉。翁の以て草野に自ら閉蔵することを欲せざる。匹夫にして名は大藩の君に通る。豈に虚ならんや。是れ在る所、宜しく表して之を章すべし。況や其の之を請うをや。迺ち其の請を諾す。既にして会四月の晦に西家夜火を失し、四方に延りて、余の舎も早く灰となりぬ。予及び妻子数人身を挺して走り出ずるも、凡百烏有せて一介すら存せざるも、猶以て幸と為すのみなり。居ること幾も無く、門人相与に金を糾めて舎を瀼水の外に買い以て塾と為す。予は然る後に稍居室に苟合ことを得たり。是に於て文器氏来りて前者の諾を以て責め、且つ寓する所の狂歌の什の恙無きや否やを問う。予は具に告ぐるに状を以てす。文器氏則ち曰く、无妄の災なり。之を悔ゆとも何の益かあらん。独り翁の託を奈にせん。予は以て之に報ゆる無きなり。先生、幸に其の云々を筆にして以て贈らば、予の債は償うべくして翁の喜も知るべきなりと。故に略翁の予に求むる所以と、予の翁を取りあぐる所以を叙して以て之に贈るなり。

文政二年巳卯十有二月初吉、山陰稲葉鳥城

伊良子憲子典甫めに叙す

石井世左衛門は狂歌に長じていたわけですが、雅号を海辺白人とつけています。これは万葉集の山辺赤人をもじったものです。その狂歌は、「尾張の亜相」つまり尾張藩の大納言に認められるまでの腕前だったと記されています。伊良子大洲がこの序文を書いたのは、文政二（一八一九）年一二月のことですが、世左衛門の書上である「石井記録」（文化十一年）の項にも「大納言様江摺物にした自作の狂歌御上覧云々」という記述があります。上覧に供した摺物の版木は今も石井家に残っているそうですが、とにかくこれが契機となって、文器という人物が伊良子大洲に序文を依頼することになったのです。しかし、大洲の自宅が火事にあい、序文を依頼された『月のみかげ』（草稿でしょうか）もそこで焼失します。その後、再度文器に催促されて前述の序文となったわけです。

そこで、大洲は世左衛門の狂歌を大いにもちあげ、「天地を動かし、鬼神を感ぜしむる」という紀貫之の「古今和歌集」序文まで使っている位、偉業を大いに讃えたわけです。

（2）伊良子大洲自撰墓碑銘

先生姓伊良子氏名憲字子典幼名吉太郎初称弥左衛門後更中蔵大洲其所嘗住宅名也其先羽州人父文蔵母阿季以宝暦癸未之歳正月朔日生先生於因府城下新街為児不甚聡慧亦不嚚頑幼学之時習読四書及長受業於箕山滕夫子之門以大器晩成見称箕浦長孺夫子聞而召見之借以書籍後従河田東岡夫子学易甚賞誉先生他無所能唯能嗜読書及論事理比壮応藩世相乾氏之招委質為臣以文学見重而猶住市中教授家塾後有故廃黜而羈縻不絶二十許年既而有恩命以児吉太郎代先生襲禄先生依旧以教授為任而弟子弥進文政四年辛巳四月十七日又有恩命見赦継而為八次郎君授経師蓋先生以幼時嘗為諸夫子所知故雖在貧窶不忍自棄孝友余力専精文学是以雖文学為教未嘗不以徳行為本其所論著皆莫非祖述周公仲尼之道弁折俗儒禅儒之謬説時有卓見而四十六士論尤見其正大之学而俗士笑焉衆人怪焉然亦以此為識者所取先生以此為楽而終其身云

右伝先師晩年所自著也先師著伝之後文政戊子之冬藩侯聞其以文学教育子弟乃下命称揚賜以白金十錠毎歳以為常而弟子弥益進焉居無何遭疾卒年六十有七実文政十二年九月十六日也都下聞之知与不知莫不皆哀惜者而況弟

子乎況親戚乎其悲可知也日月有時葬於玉泉山先塋之次廼二三兄弟相与謀而勒此伝于碑陰不肯妄増捐一字尚行先師之志乎哉若其文体則似他人著之者矣然其所以者弟子未能知也故但謹書其所知耳銘曰

於鑠先生　資性淳忠　道本鄒魯　学高日東
処否惟泰　在困能通　木鐸遐邇　狂狷折衷
前輩欽徳　後進慕風　褒命始加　誉望益隆
如何昊天　降福不終　泰山忽頽　悲悼無窮

門人　芝田温　謹撰大洲先生伝

先生姓は伊良子氏、名は憲、字は子典、幼名は吉太郎、初め弥左衛門と称し、後に中蔵と更む。大洲は其の嘗て住みし所の宅名なり。其の先は羽州の人、父は文蔵母は阿季、宝暦癸未の歳正月朔日先生を因府の城下新街に生む。児たりしときは、甚だしくは聡慧ならざるも亦嚚頑ならず。幼学の時四書を習読し、長ずるに及んで業を箕山滕夫子の門に受け、大器晩成を以て称せらる。箕浦長孺夫子聞きて之を召見し、借すに書籍を以てす。後に河田東岡夫子に従い易を学びて甚賞誉さる。先生他に能くする所無し。唯能く読書及び事理を論ずることを嗜むのみ。壮の比、藩の世相乾氏の招きに応じ、質を委して臣と為り、文学を以て重んじらるるも、猶市中に住みて家塾に教授す。後に故有りて廃黜せらるるも、羈縻の絶えざること二十許年、既にして恩命あり。児の吉太郎を以て先生に代えて禄を襲がしめ、先生は旧に依て教授を以て任と為て弟子は弥進む。文政四年辛巳四月十七日、又恩命有り。赦されて継いで八次郎君の授経師と為る。蓋し先生は幼時嘗て諸夫子の知る所と為るを以ての故に、貧窶に在ると雖も自棄するに忍びず。孝友余力あれば専ら文学に精む。是を以て文学を教と為ると雖も、未だ嘗て徳行を以て本と為ざることなし。其の論じ著わす所は皆周公仲尼の道を祖述するに非ざるは莫し。俗儒禅儒の謬説を弁折し、時に卓見有りて、四十六士論は尤も其の正大の学を見して、俗士は笑い衆人は怪しむも、然も亦此を以て識者の取る所と為る。先生は此を以て楽しみと為て其の身を終うと云う。

右の伝は先師晩年に自ら著わす所なり。先師伝を著わして後文政戊子の冬、藩侯其の文学を以て子弟を教育するを聞きて、乃ち命を下し称揚して賜うに白金十錠を以てし、毎歳以て常と為て、弟子は弥益進めり。居ること何ばくも無く疾に遭いて卒す。年は六十有七、実に文政十二年九月十六日なり。都下之を聞きて、知

ると知らざると皆哀惜せざるもの莫し。況や弟子をや、況や親戚をや。其の悲しみ知るべきなり。日月時有りて、玉泉山先塋の次に葬る。廼ち二三兄弟と相与に謀りて、此の伝を碑陰に勒す。肯て妄りに一字も増捐せず、先師の志を行うことを尚べばなり。其の文体の若きは則ち他人之を著す者に似たるも、然れども其の所以は弟子未だ知る能わざるなり。故に但謹しんで其の知る所を書するのみ。銘に曰く。

於鑠たる先生、資性は淳忠、道は鄒魯を本として、学は日東に高し。否に処りて惟れ泰、困に在りて能く通ず。遐邇に木鐸として、狂狷を折衷す。前輩は徳を欽い、後進は風を慕う。褒命始めて加わり、瞻望益々隆きに、如何ぞ昊天の、福を降すことを終えず。泰山忽ち頽る。悲悼窮り無し。

門人　芝田温　謹しんで大洲先生伝を撰す

第一グループ「某者後藤賢次郎から橋本栗谿への系譜」の場合、栗谿が「自撰」の墓碑銘だったために、次への展開ができませんでした。ここで紹介する伊良子大洲の場合も「自撰」ですから、次へのリレーは当然できません。しかし、ありがたいことに、大洲には芝田温という弟子がいて、「自撰」の後を補充しています。芝田温（の墓碑銘）は、大洲塾門人の大半を引き継いだとあるので、高弟であったことには間違いありません。

ところで、他人が自分を評する時と、自分が自分を評する時では、どのような違いがあるのでしょうか。伊良子大洲が石井世左衛門を評したものを例にすると、誇大に賞賛しているように見えます。このような撰文に特有な性質は、短所には眼をつぶり、長所は文飾を施こして記述するという傾向があることです。しかし、自分が自分を評する場合は、長所はひかえ目に、短所は直截に記すのが通例といえるでしょう。

伊良子大洲はこう書きます。

自分が子どもであった頃は、そんなに賢い子ではなかった。そうかといって愚かでもなかった。

つまり普通の子どもであったという回想です。その普通の子どもが、どうして周囲から先生として尊敬されるまでに成長したのか。

大洲の師は、鳥取藩内で大儒として令名の高かった人々でした。まず、少年期は、安藤箕山という在野の大学者に師事します。その縁で、伊良子大洲は慶安寺にある墓石に碑銘を撰しました。これによると、箕山の「門下千余人、達する者十数人」とあります。

大洲の「自撰」には、箕山が大洲のことを「この子は大器晩成だ」と評したとあります。さらに箕山の友人で藩校・尚徳館創設の中心となった人物である箕浦長孺、因州藩に易学ありと天下に称讃された大学者・河田東岡に読書の手ほどきを受けたとあります。ですから、「先生他に能くする所無し。唯能く読書及び事理を論ずることを嗜むのみ」と記しても自賛にはならないように思います。

伊良子大洲は、一時期家老・乾氏に仕えたことがあります。先代の家老・乾長孝は、『大道微言』の著書もあるような好学の家老でした。『鳥取藩史』（伊良子大洲の項）によると、次の乾長徳の時に「事に依て進諫する所あり。主聴に触れて廃黜せらる。」とあります。進言が過ぎて、「廃黜」＝失職したわけです。これに関して、大洲の「自撰」には、二〇余年後に許されたとあります。

「自撰」の後半には、ひたすら周公仲尼の道を祖述するだけで、その中心は徳行であると述べています。強調しているのは、「時に卓見有り」として自著『四十六士論』をあげていることです。これは忠臣蔵で名高い赤穂浪士の敵討について書いたものです。赤穂浪士の敵討については荻生徂徠も法律論をもって批判していますが、大洲は、いわば道徳論をもって、この事件を批判しています。

弟子・芝田温が書きつないだ銘文について付言しておきましょう。「鄒魯」とは鄒は孟子、魯は孔子の生国で共に今の山東省の地を指します。転じて孔孟の学問を言います。「否」と「泰」は周易の掛名であり、順序としては「泰」が最初で、天下泰平の時を指します。そのあと、物はいつまでも通じてばかりはいないもの、やがて「否」という時期がやってくるとします。「否」は暗黒の時代を象徴しています。弟子・芝田温は、その師・伊良子大洲の生きた時期は「否」であったが、その中で「泰」の人生を貫いたと評価しているわけです。

銘文の末尾にある「泰山忽ち頽る」とは大変な誉めようです。『礼記』（檀弓篇）に、孔子が自分の死を予知して「泰山頽れ、梁木折る」をふまえ、優れた哲人の死を言うようになります。これは芝田温にとっては修辞ではなく、実感であったと思います。

（3）芝田恭甫墓碑銘

先生名温字恭甫称荘輔弱冠始志読書学伊良子大洲数年
遂卓立初先生為支藩侯髫髫於是擢拝学職及大洲没其門
人来帰者過半乃下帷桶屋町弟子争進余亦幼受四書句読
於先生之門未及有所聞知而先生易簀実嘉永四年某月日
也享年□□□所著有論語二忘編若干巻有女無子晩年養
久保氏子名文蔵者為嗣以女配之文蔵又好学後秖役江戸

執贄塩谷宕陰業方成帰家未幾而病没年□□□

先生名は温、字は恭甫、荘輔と称す。弱冠にして始めて読書を志して、伊良子大洲に学ぶこと数年、遂に卓立す。初め先生は支藩矣の髣髴たり。是に於て擢んでられて学職を拝す。大洲没するに及びて其の門人の来りて帰するもの過半、乃ち帷を桶屋町に下し、弟子争って進す。余も亦幼くして四書の句読を先生の門に受け、未だ聞知する所有るに及ばずして、先生は簀を易う。実に嘉永四年某月日なり。享年□□□、著す所論語二忘編若干巻有り。女有りて子無し。晩年に久保氏の子名は文蔵なる者を養いて嗣と為して女を以て之に配す。文蔵又学を好み、後に江戸に秖役し、贄を塩谷宕陰に執る。業方に成りて家に帰るも、未だ幾もあらずして、病みて没す。年は□□□

芝田温に移ります。この人は農民の出で寛政四（一七九二）年に生れています。宝暦一三（一七六三）年生れの大洲とは三〇年の違いがあります。『鳥取藩史』（藩史列伝）によると、幼少の折、藩の分家である東分知家の家臣・芝田氏の養子となり、その後掃除坊主に召し出されます。分家のしかも掃除坊主ですから、いたって下位の出発です。これが碑文にいう「髣髴」の意味です。しかし、伊良子大洲の門下生として頭角をあらわし、学職を拝することになります。弘化三年藩の御儒者に昇格したということです。続けて（藩史列伝）では「温早く向学の志ありと雖も太だ記性に乏し、然れども刻苦発憤孜々として懈らず」と記されていますが、師である大洲によく似ています。一九歳で大洲の塾に入門します。東分知家では、飯を炊く係だったようで、薪の光で読書をしたとあります。大洲の没後『大洲集』一五巻を編集・出版したのもこの人でした。「温少時心に誓ひ、三十才に及ぶまで禁酒す」ともありますから、学問に狂、生活に狷まさに大洲の愛弟子といえるでしょう。（藩史列伝）では「門人は坂田潤蔵・宮部東市等最も名あり。坂田は維新後本藩の儒員に召し出され、変革の祭に当り力を教育に尽し、文学の上に付頗功有り」とあります。

（4）坂田潤蔵自撰墓碑銘

優游館酔夢卒歳叟墓

惟天生一種贅物姓為坂田名潤蔵為学供屠龍誠迂且拙矣
属辞類侏離猶不屑雕虫箪瓢有時空未嘗食嗟来非清非濁
楽酒徳忘憂没永瞑地下謚酔夢癡叟　坂田潤蔵公輸自誌

明治八年乙亥八月七日卒享年六十有七

優游館酔夢卒歳叟墓

惟れ天は一種の贅物を生ず。姓は坂田たり、名は潤蔵。学を為すも屠龍に供するのみ、誠に迂にして且つ拙なり。辞を属れば侏離に類するも、猶雕虫を屑しとせず、箪瓢時有りて空しきも、未だ嘗て嗟来を食わず。清に非ず又濁に非ず。酒徳を楽しみて憂を忘れ、没して永く地下に瞑る。謚は酔夢癡叟なり。坂田潤蔵公輸自ら誌す。

明治八年乙亥秋八月七日卒享年六十有七

前述した芝田温の墓碑銘ですが、撰者が誰なのか分かりません。しかし、私には坂田潤蔵が撰者であるように見えます。

潤蔵の「自撰」の墓碑銘は、龍峰寺の墓地で発見しました。正面には「優游館酔夢卒歳叟墓」と刻してあり、側面に百字足らずの墓碑銘が刻されています。没年・年令は誰かがつけ加えたのでしょう。しかし、補足してくれる門人はいなかったようです。□語訳を試みてみましょう。

天はこの世に一人の役立たずを生み落した。姓は坂田といい、名は潤蔵という男である。この男の学問といったら、龍の料理法のようなもの、実用には全く役に立たない。誠に世事に疎くて、つたない生き様であった。文章を作らせると、いったい何を書いているのかさっぱり分からないが、そのくせ文章を飾るなんて下らんと威張っている。米櫃はしょっちゅう空っぽなくせに、人から恵んでもらうなんて真っ平。賢人でもなく愚者でもなく、酒が大好きで飲めば一切の憂いは消え、今やこの世に別れを告げてこの墓石の下で眠っている。自分で付けた戒名ときたら、酔生夢死の人生を送った愚かな年寄りという気持で「酔夢癡叟」という。坂田潤蔵字は公輸、生前にこのように自分の墓碑銘を誌す。

まさに、師の芝田温の上をゆく「狂狷」の士です。彼の生涯は、維新後に本藩の儒員であった（藩史列伝）程度しか分かりません。『鳥取藩史』（学制志）の「版籍奉還後之学校」の項に、藩校は閉じられたが、最寄りの私塾に通学せよ、という達に八名の氏名が記されています。そのうちの師範の一人が坂田潤蔵です。これには「明治四年正月十日」の日付があります。「門人は士卒とも八才以上十六才以下」とされ、さらに潤蔵は明治八年には没しているようですから、「自撰」の碑文に書き加えてくれるような門人が誕生する暇もなかったのでしょう。

おわりに

以上、「棊者後藤賢次郎から橋本栗谿への系譜」「俳諧師渡辺長七から宗旨庄屋熊谷道伸への系譜」「石井世左衛門から坂田潤蔵への系譜」を紹介しました。連続性を持たせるために、便宜的に三つのグループに分けてみたのですが、その企図したことを、最後のグループを例にまとめて見ます。

石井世左衛門に始まり、伊良子大洲、芝田温、坂田潤蔵という系譜ですが、世左衛門はおそらく一八世紀後半の生れでしょう。彼は、天保二年九月九日に小豆餅をのどに詰まらせて亡くなりました。伊良子大洲は宝暦一三（一七六三）年から文政一二（一八二九）年で享年六七歳。芝田温は寛政四（一七九二）年から嘉永四（一八五一）年で享年六二歳、最後の芝田潤蔵は没年が明治八（一八七五）年で享年六七歳とありますから文化五（一八〇八）年頃の生れです。大洲と世左衛門の年齢はそう離れていないでしょう。

従って、この四人のバトンタッチはほぼ百年の内ということになりますが、この間に社会は大きく動いてきたのです。さらに、その生年や年齢、時代が変わるごとに、「狂狷」の度合いが強くなってきているように見えます。良く言えば身分秩序が固定し、且つ安定していた近世封建社会から、経済力重視の近代資本主義社会への移り変わりを、それと気付くことなく反映している証でしょうか。

『論語』にいう、「中庸にあらずんば狂狷」という人間観が、それぞれの撰文中に脉々と継承されているように感じられてなりません。

本稿は、平成二一年九月一一日に青谷町中央公民館で開催した、第四回公文書館巡回講座の講義録を大幅に加筆・修正したものである。